

上城恒夫氏との交流 MEMO

● 大石慶二様

先日は、懐かしい深みを感じる声を聞くことが出来て、大変嬉しく存じました。記念誌をいただいて一読し、思わずダイヤルしたのですが、正に正解でした。

時が甦りました。二重の感激をいただいた気がして、一気に時間の回廊を駆け戻ったのでした。

お礼申します。

記念誌は良くまとめられましたね。伝わってくる温もりは、大石さんのお人柄と、同期生全員に対する「じろくぼり、母校、ふるさと」への想いです。各頁から感じとりました。

植樹の情景も余韻が残ります。

後期は、つい読み返したくなる文章です。ことばや文字が失われると、国が滅びるといふ言い伝えもあります。文章や言葉は読む人、聞く人に、心を伝えるものだ、私が新聞記者になった時に教えられたものですが、そんなことも、しみじみと思いつく心の伝わる文章ですね。 教えられました。

いつのまにか82歳になりました。信じられない老いの道行ですが、肩書や権威に反発しながら、生活に苦勞する書生でゆったりと生きて来れたのは、出会いの人々すべてのおかげだと有難く思っています。 貴兄にも、心から感謝いたします。

つい先日、KTSの小笠原 弦さんと会い長い時間話をしたのですが、彼の純粋の人柄が感じられる得難いひと時でした。KTSでしりぞいてお知り合いましたらとときに語られることをお勧めします。 個人的な人生観を持っています。

人の出会いは一期一会ですから……

又、折りがあれば、是非お目にかかってお話を伺いたく存じます。

お礼かたがたの一筆謹上です。

あのがとつじぞうさま。

2月26日(水) 吉

上城恒夫

上の文章は商店街時代の先輩・上城恒夫氏に「記念誌」を差上げたお礼に感想と氏の著「二階堂進」を戴いた際に届いたお手紙です。

下の文章は『50周年記念誌』と一緒に同封した僕から上城氏への文章です。

●上城恒夫様

大石けいじ

2015.1.17

昔、ぼくがまだ20代で鹿児島に男性美容師として帰ってきてまもなくでした。通りの顧問格として上城様とお知り合いになった頃、店の店内新聞（主にスタッフ対象）の校正をしてもらって山形屋の企画部？を訪れたことを思い出します。

忙しいのに時間をさいて、つまらない小学校の壁新聞のような手書きペーパーを熱心に目を通ってくださりました。「大石君、これいいよ、皆のモチベーションをあげるのにいいよ」と思えば、直す所なんかないよ」と言われ結構自信をもったことを思い出します。

—大学を出て変なことから東京で付合っていた妻の実家にスカウトされそれでも夢をいっばい抱いていたころでした—本当にあれから50年がアツというまに過ぎようとしてます。

今回の上城さんの年賀メッセージはなぜか胸を打たれました。内容というより、ぼくはあのメッセージを書かれた時の上城先輩の心もようが伝わってきました。今までになく何ぶんか読み返しました。（今までは2回ほどですが）そして、瞬時に思いついたのがこのことでした。

そうだ、「上城さん」この記念誌を読んでください「そう思い勝手に送らせていただきました。」

このあとの文章は、ぼくの美容の弟子で何故か「師匠（ぼくのこと）の生き方を見習ってください」という變わの者がいて（都城でサロンを数店舗経営）彼にもあげようと思って書いた添え文ですが今のぼくの心境なのでそのまま失礼かもと思いつながら載せさせていただきました。（彼はがん患者です）彼は死ぬのをどうもやわらかい世界を語って聞かせます。それと、年賀状？の最後にしたためられた上城さんの一行の文は「自分史作成もしくは文字の作品」を・・・と解釈しました。もしそうなら楽しみですよ。心待ちにしていますよ。

●—謹哉くんへ—

ぼくの60歳代は中国美女（万人が認める美人とは限らない）に取り巻かれていました。（これもただ単に関わっていた程度かも知れない）—といっても何名かとは（シャケンと云う名の長沙女はラブリターをつっかから見られて妻にばれたけど）彼女らとは、告白しますが、いわゆる「ゆへこのころまではいきませんでした」

彼女らが一様にぼくに言った言葉は「先生は若いミスネ。まだ充分恋人候補に値しますヨ」でした。

今、70歳台になり中国語での会話と中国自体がぼくからいろんな意味で遠くなってしまいました。

そんな訳で回帰本能のようなものに引きずられ高校、大学時代の過去美女（ときに両性）に関心が移ってきました。さすがに肉体的には接触したとしても一切のときめきは感じません

が「ゆめまほろしのおかし」「戻って（正面は現在、背面は過去）の顔を交互に使い分けて付合っています。

記念誌の発行以来、ぼくからの電話をとつせん受ける彼女等の電話口での表情は歓喜に震えているように覚えます。とつせん、あこがれのタフガイ・裕次郎が甦ってきて」「わたしに電話をしてきた。しかも、旧姓を呼び捨てだったの、おかしの愛称を言っつへれたわ……」そんなリアクションです。

もう、しゃべるほ、しゃべるほ、学生時代にほとんと話したこともない（僕らの時代は共学は登下校のときだけ）なのに喋りすぎて、ぼくの用件も聞かれないまま切ってしまう人もいます。

そのあとにぼろぼろと丁寧で驚くほど綺麗な文字で書かれた手紙が届きます。「貴方のことは高校時代から（その後のいろんな会合の時にも）物静かで、どこか他の同級生とは違ってました。……」「めだたな、一見せつめじだごんごんすー学生時代を思いだせればとめき心ごんごんごんターです。もじかしたら誰でもいいのかも知れませんが、しかも彼女等の多くは高校時代にクルスのマドンナとして数多くの同期男子の片思いの傾城たちです。……とまあ、書ごころと限りが無へ、且つ貴兄にやって無関係のことばかりなので止めますが……」おまの言ごたごたごた、何感になつても扁頭体をびへびへせせる気持ちだけは（ごやごごの意味ではなへ）忘れなごうだと思ごます。

親として、夫として、身近の親族の代表者として、あるいはしがらみの取りつかれた身近の社会のリーダー格としての「自分」。それなりに立派なことだし、勲章者かも知れませんが「それはそれで壊さないまでも」それが自分のこれから先の人生のコン（処世訓）ではないとごごごごを自覚するごうです。

自分のことでは、これから先は1日をより長くする努力をしたい、いかに睡眠時間を少なくするが、3時間長く起きていると1週間が8日になる。1年が13カ月になります。そのためには睡眠時間を5、6時間にすることを。今まで、8時間寝ていたら2時間を読書か、好いテレビ観賞に使えばいいごう。

謙遜ではなくこの記念誌の作品群は—自分のものも含めて恥ずかしく読み返したくもない—たいした内容—ではありませんが、これを手にした同期人たちは過去を懐かしみながら、同期としての誇りのようなものを感じてくれているように思いました。

実際に多くの仲間から読後の感想が届きました。大方は僕に対する労いと感謝のことばですがその裏に「自分たち同期の誇り」がメッセージから感じとれるのが嬉しかったです。

一緒に送られた感想文も送ってみます。ただ辛いのは、記念誌に投稿してくれた内の2人が既に鬼籍の人になりました。アツというまでした。昨年10月に刊行したのに……。うち一人は自分の完成作品を見ることもなへ。

もし、近くの方でパソコンを覗けられたら(アイパッドかスマホでもいいです)以下のサイトをクリックして見て下さい。八期文庫HPを作りました。

そして、寄稿して戴けたら上城作品も載せたいと思います。ワードで欲しいです。HPサイトとEメールアドレスです。HPは

<http://www.nihao-kagoshima.jp/hatiki55.html>

● 上城氏に無関係の『ぼくの思ひこぶ』を載せませぬ。

私たちにはもう具体的なスケジュール表はあてにならないのだな、と感じた昨年末から今年初めの出来事でした。

今からは現在・過去・未来で済むのではと思います。もちろん明日を含む未来です。そうそう、過去といえば記憶のことですが人間の記憶は時系列に、つまり年代順に並んで記憶されていないのではないかと思います。他人と話をしている自分だけがその同じ過去の出来事を全く憶えていない「えっ認知症」とあせることはありませんか。

人それぞれ自分の整理ダンスを脳内に持っていて、その時の受信程度によって整理されるケースが違ふんだと思うんです。ポーっとしていたり、聞いてても感銘を受けなかったり、また時にはすごいショックを受けたり、そくそくと胸がときめいたり・・・と、その程度ごとに個人の整理ダンスの場所が違ふのじゃないかと思えます。

胸キュンの入るケースは「その人の扁頭体を通りますから」とても、クリアで昨日の事のよう

うに思い出す。本人は目の前に浮かんで現れるのではないか、と思うんです。何を言いたいかと言うと全く記憶にない時はその時記憶の箱に入れなかったか、つまり、もう取り出すことはないコ/ミ箱に保存されたということです。なので認知が来たと心配しないことでは。

つい先日妻の伯母が亡くなりましたが周りの兄弟姉妹が一樣に回顧する言葉が「頑張ったから、急ぎ過ぎたのよ」「無理していたからね」と言う労いことばでした。まあ、必ずしも言葉通ではないでしょうが、われわれ、これからは、元気なうちはどうか、肉体の頑張りは程ほどにしたいと思っております。間違っても若いものに負けるものかはありません。

他人が重い荷物を持ってくれる時は、あるいは、「わたしがとってやるから」などの場面が来たら「悪いはねえ」がいちばんの正解です。これからは他人が代われない自分の足腰の鍛錬などは欠かさずマイペースで鍛えて、仲間内の旅などへの参加の為の準備と、自信付けを心がけましょう。

写真のことで思いますことは、何かあって、その人の写真が欲しい時、本当に写っている目当ての写真がないことです。100枚ある中で4, 5枚あったらいい方です。1枚もいいの

がない方が多いです。いや、写っているんですけども集合写真には、いっぱい。

●上城氏に無関係ですが『八期女性に今年』送った文章です。思い出のために・・・載せます。

1月17日(土)の八期新年会の風景をDVDにしてみました。

びっくりました。ふたつのKが働いたのでしょうか今回は例年の倍近い42名の参加者が集いました。会場に入るとそこは、自分の声が聞こえなくなった世代の、一瞬渡り鳥の島に迷い込んだような、悲鳴のような大声の会話と、お互いからだを叩き合う異様な、はじけるような笑い声に包まれていました。

隈元くんの開会のことばに続き、浜崎会長の挨拶の終りは鳥たちの私語のるっほの中にかき消されてしまいました。プログラムらしきものは一応たてていたようでしたが。「遠路はるばる(関東・関西・福岡)組」による乾杯!そして簡単な挨拶・・・と司会の隈元くんは目の前に来るご馳走を横目に決めているカリキュラムを履行すべく一生懸命でしたが、交代でマイクを握る「遠路はるばる組」さん達の声はほとんど皆には届かずというより聞こえないから聴いている人がいないという状況でした。それでも会場の雰囲気は参加者みんなの「至福の笑顔」に包まれてそれはいい雰囲気でした。

お久しぶり組も今回は多く参加して喋りたいことがお互いいっぱいあるのでしよう。少しは昨年末に届いた記念誌の懐かしい白黒写真に喚起されたのかも知れません。話したいことがお互い喉に詰まって口に出ないものだからもどかしく相手の肩や手を握る人・・・それでも、「みなさんの顔を忘れている人もおられるようですので簡単な自己紹介をしてください」とマイクリレーが始まったも80%の人は聴いていなかった。最後に立ったひとりだけえらくうけていただけ。

幸いマイクの前だったのでぼくは大体は聞いていましたけど、ほぼ、皆さんが先日、あっけなく(は失礼な表現かもしれないけど)あちらに逝ってしまった平澤希代子んの思い出にふれていました。みなさん寂しくなったのでしょっね。

さて、私ごとですが、新年会が終わったころ、75歳以後の生き方についてふっと考えて見ました。思うことは自分の宿題についてでした。もう今から手足を動かすものはパスしようと思います。体力維持のジョギングや水中歩行などはいとして、今更テニスやサッカーなどはごめんです。

それにしても(少しは知っているけど他人に語れるほど)知らないことがこの世の中にはいっぱいあることに驚かされます。眼から得る知識はテレビや読書で得られますが目ほど能動的に耳を使っていないのに気付きました。そうだから耳が遠くなる可能性が強いぞ、そう思うと急に音楽を聴きたくなりました。

昔の音楽は脳内の音楽ケースにも、スマホやiPadにも2000曲以上の音楽がストックされてあるけど好きなのに未開拓な音楽の分野があることに気がつきました。まずは耳慣れたジャズは横に置いてクラシックに挑戦しようと思いいったのです。

今まではシンフォニー、コンチェルト、ソナタ、重奏団など演奏形式にジャンル分けして聴いていました。それを演奏家ごとに聴いてみようと思いいったのです。

ベートーベンとモーツァルトそれにチャイコフスキーは（というよりほとんどこれらが中心の）交響曲と協奏曲は何度も聴いている（BGM風ですけどね）ので今度はブラームスとマーラーを解説書を見ながら聴き学びつつ、つかと意気込んでいます。

イヤフォン感覚でもどこでも聴けるように考えました。クラシックは高音域と低音域の幅が広いので Bluetooth を通ってワイヤレスでそれなりのスピーカーで聞こうと奮発してBOSE（ボース）の小さくけれど驚くほど高性能—つまり大型スピーカーに負けないいい音が出る—のをアマゾンでネット買ってみました。

ちなみに Bose SoundLink Mobile speaker II）30,000円 です。繋ぐコードも電源コード不要なカバンに入れて持ち運べる超便利なスピーカーです。こう見えても僕は昔はオーディオマニアでした。

音の入り口（カートリッジ）から出口はもちろん繋ぐケーブルにまでこだわった時代（40年前）もあったのです。

無料のアプリ MusicTubee からプレイリストを作り、取り込んだ曲を寝る前（1曲（30分程度））だけ聴くようにしました。

何かを学ぶ、気持ちごとくきめ、脳細胞を刺激するつまり、若さを保つため（いちばん苦もなく得られるものが耳からの刺激だったと思いついたのです）。寝ていても、雨も風も関係なく、手足を使うこともなく刺激を受けるものは聴覚にしかずと思いついたのです。……まあかなりのコツコツですがね。

寝る前には猫を膝の上に乗せハイボールを片手にブラームスのピアノコンチェルト第1番に浸り、朝の目覚めはヘッドの中で猫の足をもみながらマーラーの『巨人』を聴く……そんなイメージは抱いて戴ければ幸いです。